

川柳雜誌

第二卷 第四號

大正十三年三月三日第三號
大正十四年四月十五日發行
（每月一、四、七、十、十三、十六、十九、二十二、二十五日發行）

川柳雜誌（十五號）



草

川柳雜誌 第二卷 第四號 (大正十四年四月十五日發行) 目次

一茶の句 相元紋太 (二)

川柳略語解 (四) 西原柳雨 (八)

本社三月例会 若林吐露樓報 (三)

第九支部句會 麻生路郎選 (四)

近作柳樽 省二生 (二)

柳の床柱 塚崎松郎 (二)

川柳界の事ども 大島濤明選 (九)

募 校 長 駒井美の作共選 (三)

夜 櫻 麻生霞乃共選 (三)

川柳家の戸籍調べ (一)

消息 (二) 戲作ちよきく バコ生 (三)

小 嘶 二 三 松雨生 (二) (二)

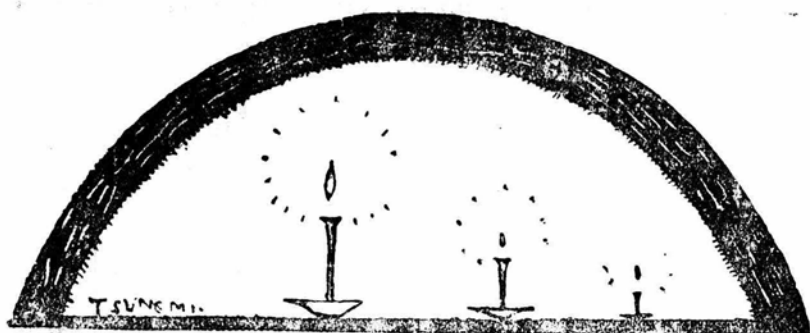
川 柳 塔 (三)

菰豆、かぼら、松雨、柳路、美の作、輝翠、松郎、稚幽、馬行、一柳子

遅日莊偶會 (九) 編輯後記 松郎、馬行 (三)

春 (表紙講) 吉岡鳥平

句 評 (近作柳樽より) 松路郎 (三)



第 二 卷 川 柳 雜 誌 第 四 號

川 柳 の 社 會 化

川柳の内容を古川柳よりも一層廣く、一層深くすることは、いつまでも怠つてはならないことである。

が、しかしそればかりではない。眞珠を眞珠として世の中から認めて貰ふ必要はあるまいか。

現代の川柳家が自惚れてゐるにもかかわらず目下の川柳は社會からその割に認められなさ過ぎると思ふ。私に云はせればもう少し認められてもいいと思つてゐる。

そこで私は川柳の社會化運動を提唱したい (路郎生)

一茶の句

紋太生

川柳は川柳である。川柳は何處までも川柳でなければならぬ。——此の言葉は從來度々使用された言葉である、怎麼意味で怎うした場合に使用されたかを考へて見るに、從來の川柳を革新して新しい立場の川柳を樹立しやうと言ふ所謂革新川柳家の言論に對して今までの川柳が持つ所の氣分を尊重する所謂傳統派の川柳家が反駁を加へる場合、即ち川柳には昔から傳へられた氣分があつて、それを無視したものは最早川柳ではなく外のものである。川柳は何處までも昔の川柳の氣分を持つ處に川柳としての價值がある。「川柳は何處までも川柳でなければならぬ」と言ふのである。

私は斯うした從來の意味を離れて全く別個の意味の言葉として、川柳は何處までも川柳でなければならぬと改めて叫びたい。私が改まつて怎うした言葉を發するには或る動因がある。或る日、友人A君の宅へ三人の者が集まつた。その席上、A君が一茶句集を持ち出して私達に見せて言ふには、一茶の句には川柳に非常に酷似したものが多く、例へば、日が永い／＼ののりくらり哉にしても亦、叱つてもしやあく／＼とした蛙哉にしても亦、大根引大根で道を教へけりにしても皆二字三字の修

正で川柳になるではないか、また外にも澤山ある、寢て起きて大欠伸して猫の戀なきは其儘川柳と言つてもよいではないかと言ふのであつた。私はその時何となくしにその言葉に對して非常に不愉快を感じた。私にしてもそれ等の句が僅か二三字の修正に依つて川柳と同趣になることは形の上に於て認めない譯には行かなかつた。日が永い／＼ののりくらりする。叱つてもしやあ／＼とした蛙なり。大根引大根で道を教へて居、怎うして見るに俳句と言ふよりは川柳と言つた方が適はしく思はれるのであつた。然し乍ら俳句として作られたものが僅々二字の修正で川柳となり、川柳として生まれたものが一寸修せば俳句になつてゐるに簡單に片附けて仕舞ふその輕薄さには何となく私は同意することは出来なかつた。私はそんな馬鹿な事はない、これは俳句として作られたものであるから例へそれが巧く修されたとしても川柳に酷似してゐるに言ふ事はよいが川柳になつたとは言へないと言ひ切つた。

A君の考へは、そんなに深い意味があつたのではなく誰でも思ふ様に單に一茶の句が、川柳に近いと言ふことを言つたに過ぎないのであらうと思ふ。此れと同じ様な事が以前にもあつた

大正二年二月博文館から出た西原柳雨氏編の川柳雑句類解と言ふ冊子の序に文學博士の大槻如電氏が次ぎの様な事を書いた。

「嘗て俳諧に於て前句は忘れたが余の附句 雲井のかりの見ぬみ見ぬすみせしを寂羅坊が先生をそれでは連歌です云ふにおうま心づき 雲井のかりの見ぬつかくれつ、みせん云へばそれでこそ俳諧一本まるらる、余は即時に川柳ならば雲からがながたりひつこんだり、かねと共に大笑せしこゝありき」まだその上に附加して「連歌と俳諧と川柳とは此言葉つかひの差にあるなり、今の川柳連中に此別を心得たるもの無きが如し如何」までダメが押されてある。その頃これに對して名古屋の「鯉鉢」誌上であつたかに一すした駁撃が加へてあつた記憶してゐる。

眞實にこの言葉つかひの差が俳句と川柳の相違であつてよいだらうか。僅か二三子の改修に依つて俳句が川柳となり川柳が俳句と變るなき言つて済ましてゐてよいだらうか。形の上に於て變化をした如くに見るのが或は當然であるかも知れない。

私はそれを言ふのではなく、さうした觀察をして済ましてゐる心。その觀察の心持の裡に藝術上の危機が潜んでゐる事を指摘したいのである。さうした心持の裡に川柳の容易に向上が希まれない原因が胚胎してゐるを叫びたいのである。

私はこの動機に依つて俳諧守一茶の句の大體を吟讀し彼の生涯の大略を知ることを得たが讀めば讀むほき知れば知るほき彼

の句が少しも滑稽でなくなり瓢箪で無くなつて滑稽らしく見ぬ奥に彼の涙を知り彼の眞面目さを感じるのみである。だから猶更のこゝ彼の句を少し修せば川柳になるなき言ふには彼の句に餘りに力があり過ぎることを思ふのみである。尙一步進んで彼の句を俳句なき、稱するさへも似合はしからぬこゝで、一茶の句、或は一茶の詩、一茶の藝術と言つた方が適切な様に思はれる。もう此の時は川柳でもない、俳句でもない一茶の藝術と言つて最も然りである。

私達川柳を作る者もこの境地にまで到達したい。それには今少し眞剣に自分の川柳にまで自信を持たなくてはならない。自分が川柳を作る者であることに自覺をしたならば、自分の川柳が俳句に早變りをする等は決して承認出来なくなるであらう。

言葉つかひの相違に依つて變化する等は言へなくなるであらう俳句を作る者は自分の作つたものは何處までも俳句である自信を持つがよい。川柳を作る者は自分の作つたものは何處までも川柳である自信を持つがよい。だから私達川柳作家から言へば川柳は何處までも川柳であると言はなくてはならない。決して私達の川柳を改修して俳句だと言ふ事を承認してはならない。川柳は何處までも川柳でなくてはならない。

斷るまでもなく、川柳は何處までも川柳であると言ふ言葉の裏には自分は何處までも自分であると言ふ意義が含まれてゐるのである。



近作柳樽

路郎選

實例の一つに濟まぬ名を擧げる
貸家ではない貼紙を惜しく見る
母の手で淋しく罪の子が育ち
嫁に行く噂を娘走り抜け
ちも重い火鉢を運ぶ手を借られ
負けさせただけが女房の誇りなり
言ひ過ぎたあで優しい氣にもなり
身のほごを知らぬ理想に嫁き遅れ
遠慮する客で何んだか物足らず

同 同 同 同 同 同 同 同 大阪
同 同 同 同 同 同 同 同 乾
坤

要領を言へし聞く耳忙しがり
末つ子を泣かした兄はそこに居す
腕力の話女に持てぬ奴
遠慮なくかき分けて行く巡查なり
好い人を褒めてる口に薄笑ひ
こればかりおゆるしを乞ふお酒なり
修繕へ俺が手出すこんなもの
ぬけて出る裏口へ月強く照り
そんな事つまらないわし許嫁

同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 元 同 同 同 同 同
山

同 同 同 同 同 ○ 同 同 同 同 同 同 大 同 同 同 同 同 同 室 同
同 同 同 同 同 失 同 同 同 同 同 同 し 同 同 同 同 同 同 愚 同
名 ける 劣

ぎの口もみんな冷たい救ひの手
 得る物を得て踏み台が邪魔になり
 義損金、金によつての活字なり
 唄つてゐる心も知らず居て寝める
 桃割れの物の哀れさ知り初めて
 もう一度後を頼んで絶ゆる息
 縁談で一ぱいになる娘の間
 止められた踏切に立ついゝ日傘
 木から猿も落ちるたさえて慰める
 要るだけの儲けじやすまぬ人間苦
 故郷を出た時の心にもうなれず
 そうでした斯うでしたなきクラス會
 子に矢張り持たせてやつたのが落度
 我が物であればと思ひ縫ひつづけ
 歸つたら呼べミ別間で待ちうける
 後押しの子房の背でよく眠り
 みじめさは娘盛りをさうに越し
 そこくに片付けさせるお客が來
 満員のボツベン世話がかゝるこ
 混雑に姉を島田で見付け出し
 這入らして貰へミ門の連れを呼び

旭川

志貴南

車 掌臺又遠足が邪魔をして
未亡人ちつゝ氣兼ね化粧なり

同

同

同

同

奥さんの弱味を女中だけが知り

同

同

同

同

就職が出来て久方振りの酒

金澤

喜花

同

同

命日じやないかミ母の御立腹

同

同

同

同

いつ來ても小使室の湯が沸り

同

同

同

同

春淺くまだ裏町は干せ切れず

同

同

和歌山

左馬

雑踏に巡查も押されくゝてる

同

同

同

同

下駄棚へ小使も來て探せども

同

同

同

同

寢轉んで見るメートルの早見表

神戸

一閑子

同

同

友情の行李は明けて貸して呉れ

同

同

同

同

支那趣味を饗めて出過ぎた茶をよばれ

同

同

同

同

自分だけ時間を守る椅子に掛け

同

同

同

同

冷水を呑みに車座一人立ち

同

同

同

同

四帖半今日はお越しの火がいこり

稗島

眠聲

同

同

此の俺に十四の娘が易に出て

同

同

同

同

菜の花へ弟理科の本を持ち

同

同

同

同

病める友へ

同

同

大阪

竹榮

君の椅子まだ其のまゝに君を待ち

同

同

同

同

鼻唄で戻る我家の養蘇かけん

螢ヶ池

叟峰仙

同

同

飛行機で煙りの都通り抜け

同

同

朝鮮	神戸	鞆	能勢口	同	同	同	同	大阪	同	千葉	同	大阪	同	尼崎	同	同
三枝	正坊	茂	普天	みのる	柳人	山月	同	鳶歩	同	駒人	同	蚊十	同	喜泉	同	濁水



川柳略語解

(四)

西原柳雨

牛のよだれのやうにたら／＼と續くの
 讀者も定めてうんざりだらうと思へき
 實は先達て來萬句合の抄録を整理してゐ
 たので次ぎ／＼と現はれてくる略語に愚
 見を附して片つばしから登載を御願ひし
 た次第でこんなことなら全部蒐集の上今
 少し順序立てて書けばよかつたなと
 愚痴つた處で始まらないからその後又々
 見附け出した二三を發表して大方の御異
 見を伺ひたいと思ひます

大川が近しかつたがやみ／＼ひき
 此れは芝居町が淺草猿若町に移轉した
 後の作であるから天保十三年以後の句で
 あることは云ふ迄もないがかつばしは芝

居の客引の異名、無暗に引込むので河童
 とも、晴天にも雨具を着て居たので合羽
 とも、語原に就ては二説あるが此句は河
 童の方を取りたる趣向であると思へばむ
 やみ／＼はさうしてもむやみ／＼の省略でな
 ければならぬと思ふ。

しかの宵つ張り狸はらを立て(安永九)
 いかはあしかの略にて海驢と云ふ海獸は
 何時も岩上に這上つて眠つてばかりゐる
 動物である所より眠りたがる若い女特に
 新造なきのこをあしかと云ふのである
 されば宵つ張をして出てばかり居る癖に
 やつ／＼歸つたから寝なんしたかとも何と
 も云はすそつ／＼這入つて直にぐう／＼と

駢をかいて居あがる／＼狸寝人の客がブリ
 云ふのも尤である
 納言のは差合のない枕なり (安永四)
 納言は少納言の略にて清少納言の枕の
 草紙を云へる句であらう

先妻の連夜いぢで○せたがり
 亡妻の通夜に精進潔齋をしてゐる亭主
 に強ふるなきは随分ひさい後添へである
 がいぢ／＼は勿論いぢわるの略にて川柳に
 限らず一般に用ゐられてゐる詞と思ふ此
 句は末摘花にある

駒形は百兩／＼は五十なり(安永七)
 といは兩國の略なるべく前に國分の略
 に國と云つた句があつたが、あれはコク
 これはゴクと明かに清濁の別がある句義
 は駒形の百助と兩國の五十嵐と二軒の鬘
 附油店を對稱せる謎式の狂句であらうこ
 思ふ

しやの果さ知れたは酒のしたみやう
 是は極古い元禄頃の前句附「見れば見
 る程／＼」の附句であるがさつ／＼、小指
 をはねてちよつ／＼杯の樂をしためて、

献す具合が素人でないこの意にてしやこ

はけいしやの略語云ふよりは寧ろ其時

代から安永天明頃に至る迄専ら粹客連の

間に用ゐられた通語にてまだ外にも「し

やの送り翁が雪のころ迄(文政)」「こ

云ふ、轉ぶころ迄客を送つて附いて來

るのやら「しやこばかり云ふ答藝のない

女(天保)」「なきさのさ節が喇叭節の外

はいけないのなきくらもある筆の序今

少し世間普通の略語一二を擧げて見れば

小間物屋おめか、帳へつけて(明和)

のめかはめかけの略であること云ふ迄

らないが小間物屋の覺帳に名が知れぬの

でおめかを書いて置いたなきは面白い句

と思ふ

先づ大尾としておきます

連日莊偶會

二月二十二日

小 鯛

すへられた小鯛は箸をつけた。双柳

お頭もついてゐます。小鯛なり。二柳子

寶に残りらしい小鯛をまだ。蔑乃女

折詰の小鯛。僅かに尾をそらし。同

誕生日小鯛にし。く時節柄。一路

新世帯小鯛。二匹の睦じさ。同

大鯛の方は値段をきいた。丈。幸堂

晩酌の膳に小鯛は値をきかれ。同

一三匹一度に焼ける鯛にして。同

こらなんや。亭主小鯛を裏返し。馬行

貪弱なもの。買ひよつた。小鯛。同

小鯛二匹つけて。亭主を待つて。同

箸つけて。見ら。小鯛の瘦せて。同

子のためにやうく。買。小鯛。路郎

おちぶれて。小鯛の膳をさみし。同

母親の心づかひが。小鯛にて。同

れん。鯛畫のお膳の手くらがり。同

世 辭

世辭一ツ。二娘はおほへたり。幸堂

お世辭ではございませ。柄を。路郎

もう世辭を世辭して。聞く年。同

淀みなく。お世辭同志が流し。合。蔑乃女

新店で堅い。お世辭を聞か。される。同

みにく。お世辭でかく。す。仲居。一路

ふ。ころに入つて。お世辭。同

來いつて。君一体君は何處に。ゐる。双柳

美しい娘の犬は。ほめ。られる。同

去ぬ段になつて。巡査も世辭を。同

兒を連。行。斗りの世辭を受け。馬行

その世辭を娘。おか。つて。去に。同

二。つ。三。つ。吊皮を世辭。越。わて。來る。同

連日莊雜觀

連日莊井戸か。思や底が。あり。馬行

臥て。た。い。ふ。に。元氣な。連日莊。同

ロンドンが。また。叱。に。來る。二階。同

連日莊。ぼん。に。ほ。うれん。草が。伸び。松郎

連日莊。ま。ち。り。く。の。古。句。の。やう。同

連日莊。留守で。三十九。錢。損。同

本社三月例會

三月十四日
於端之坊

三月十四日夜 本社三月例會を端之坊で催しました。 参會者は

路郎、溪花坊、日車、蹄二、輝翠、刀三
双柳、悠々、飯山、世間亭、放馬、秀哉
波郎、文久、一醉、眠聲、しげる、百石
長人、欣遙、夢路、凡平、春篁、信か
す、蝶之助、兵太、秀次郎、萬よし、月
兎、章駱天、一路、かほる、古城山、松
雨、松郎、馬行、二柳子の諸氏(二柳子記)

裾 (兼題) 路郎 選

兩親に重荷のおりた裾模様 支柳
二三べん裾を合はすも女の子 幸堂
ハンケチで裾を拂ふも女なり 放馬
蒲葎の裾のいたむが見へるやう 秀哉
廣重は裾をからけて富士を見せ 文久
裾だけの洗濯にする新らしさ 一醉
酔つた眼にお冷を運ぶ裾を見る 溪花坊

蒲葎の裾は疊を描くかたち 輝翠
姑に嫁の裾除け氣に入らず 双柳
買物でしばし押さへる裾の風 世間亭
それ裾が引づります 臺所 しげる
裾見れば女兩足揃へたり 長人
着飾つた裾が亂れる忘れ物 凡平
裾踏まぬやうに花嫁席を立ち 二柳子
代理人袴の裾を見てもらい 松郎
裾模様これが娘へ貰ひ仕舞ひ 月兎
裾模様賣る相談で 又もめる 同
返辭した舞妓は裾に一苦勞 馬行
踊子の裾は揃つて 刎ね返り 同
目出度さはみんな着る裾模様 飯山
丸洗ひ裾からほごりく 落ち 同
連れて出た舞妓の裾の重たさう 古城山
だらしない裾を見て去ぬ出前持 同

五 客

縫ひ込めて裾で牡丹の花が割れ 日車
囚人の立てば哀れな裾となり 同
女の子また身のつかぬ脛を見せ 世間亭
國の親裾を拂ふて上がつて來 悠々
翻る 裾より 早き燕 日車
まあ裾を拂へこはやる氣を押へ 蹄二
裾ひらりひらり苦勞は胸に秘め 同
(人) 裾踏んやうに出來た抜衣紋 悠々
(地) 綿繪の怒りを厚い裾に見せ しげる
(天) 貯る裾巻、癖いつか止み 萬よし
(軸) 浪切てるるに裾ひるがじ 路郎
逢ひたかつ逢ひたかつ裾を 同
ビルデング 溪花坊選
ビルデング今日は西風が入り 欣遙子
ビルデング片側濡れる吹つ降り 蝶之助
雨を氣付かずにビルデング 一醉
ビルデング和服を野暮な物に 凡平
ビルデング下駄の置場を眼で知し 路郎
屋上に花が咲いてるビルデング 飯山
一齊にカーテン下ビルデング 百石

面會が戸迷ひをするビルデング 秀哉
 ビルデングさうくく建ちあがり 馬行
 ビルデング堀が取れるミ窓斗り 同
 ビルデングみんなさき書になり 波郎
 堂ビルの一番下の下駄の音 同
 機關紙を出さじ借るビルデング 萬よし
 ビルデング隣の顔を稀に見る 同
 のつくする事を覺るビルデング 長人
 かくれんほしと思ふビルデング 同
 ビルデング人間様を小さく見る 悠々
 ビルデングこゝまで影が射さる 同
 (人)ビルデング月賦の服を着て這入り 路郎
 (地)子負て來てビルデング高見 松郎
 (天)ビルデング蠅迷さる迷り 文久

龜 古城山選

思ひ出した様に龜さん首を出し 百石
 花吹雪龜やゝこしい 蹄二
 冗談のやうに石から龜が落ち 馬行
 母親の脊から龜をこわく見る 凡平
 日向ほこ龜龜の上に乗り 波郎
 あはむけにされて困つ龜になり 同
 氣まぐれ龜はこつちの岩へ來る 刀三
 龜の甲さ知れ蜻蛉は止まりかけ 同
 龜の甲水に柳は動いてる 溪花坊
 裏向けた龜の努力は起き返り 同
 日永には龜もほく困つて居 路郎
 石投げた拍子に龜は向きを變へ 同
 (佳)ステツキの先が危い龜の首 輝翠
 (佳)お彼岸の龜満腹の糞をあ 百石
 行列 松郎選
 行列を離れて一人逢ふてゐる 双柳
 行列の後ろごんちゃんに歌 悠々
 萬歳萬歳行列腕を伸びるだけ 文久
 尾で行けない子供に旗一つやり 一醉
 行列へ父おちついて水を撒き 眠聲
 行列に見られてならぬ顔を持ち 長人

行列を見てる車は汗を拭き 百石
 行列のお供で私服草臥れる 溪花坊
 行列の駕からはちミ亂れ 夢路
 賃金を上げろくミぞをろぞろ 蝶の助
 行列のだんく太い聲になり しける
 關守も威儀を正して列は過ぎ 日車
 行列に向ふの香具師の輪も崩れ 蹄二
 行列のミぎれくミに笛が鳴り 輝翠
 (佳)土下座する方へ行列振向 春篋
 (佳)轉磨の殿に行列町へ入り 波郎
 (佳)行列へ言葉をかけて淋し 刀三
 (佳)行列のきつちも困る撒水車 古城山
 (佳)行列の中に母家の旦那も居 路郎
 (佳)いゝ年を行列に黙つて居 双柳
 (佳)行列はだんく後へ云さ 飯山
 (佳)行列が通るミ車音をたて 秀哉
 (佳)一番に母行列の兒を見付け 萬よし
 (軸)行列へ鍛冶屋は青い火を見 松郎
 (同)行列へ背が低いうちの人 同
 百姓の素朴さぐに腹を立て しける

百姓の前を通つて無禮なり 夢路

履歴には農業として國を立ち 文久

百姓の煙草の煙に餘祐あり 百石

一蹴に力をこめて飯さきめ 二柳子

百姓にまさか違へばなるつもり 刀三

蹴を持つ汗に空氣の味を知り 萬よし

頼冠りいつそ百姓らしくなり 波郎

百姓は和尚へみんな任しきり 同

南米へ行つて百姓する氣なり 放馬

散つてある様に百姓野良に立ち 同

百姓の器用案山子を頼まれる かほろ

百姓は白ちりめんを嬉しがり 同

百姓はくやみ大きな聲で云ひ 春篋

百姓の娘を兄は嫁に持ち 同

百姓を花見の客はさう見て 双柳

百姓に何學問が要るもんか 同

百姓の鼻唄に牛ついて行き 韋駄天

小作人大玄關に座り込み 同

百姓に見込みの變る雨が降り 輝翠

百姓に組合があり揉めがあり 同

そよ風を切つて苗束飛んで来る 悠々

武者小路愚昧の民に教わられ 同

一反の田にめぐまれて草鞋履く 松郎

終日を金に騒がず蹴を持ち 同

知らぬこゝ多く百姓死んでのき 世間亭

嫁さつて京見物の春をまち 同

百姓の頃の名前が嫌になり 一醉

百姓で一生終る嫁を取り 同

百姓へ牛も歸ろこ鳴いてゐる 眠聲

百姓の口は今年も不作なり 同

百姓はすぐ汗に出る水を呑み 飯山

歸農した譯を役場の人が知り 同

百姓に廣告だけの百貨店 蹄二

泥の手の百姓かゆいこが出来 同

百姓の溝を狭んで話す事 凡平

百姓さして百姓の申し分 同

百姓を嫌ふて父を悲しませ 馬行

百姓がもう内職のやうになり 同

立志傳まだ百姓の我を見る 秀哉

百姓は自分の畑を廣う見る 同

百姓の子が若様をかばつて 月兎

百姓の家へ手負ひの武者一騎 同

畦に立つ百姓一人繪にされる 溪花坊

牛さ唯百姓稼ぐばかりなり 同

百姓はこの蚊にランブ一つ點け 同

百姓の従妹はるるたよつて來 同

藝者決して百姓の子云はず 路郎

百姓を訪へやいこをすねてゐる 同

出世した子へ百姓の胡坐なり 同

肺病になつて戻つた百姓家 同

水

撒水車も少し待てば雨が降り 一路

道頓堀見て暮らす程澄みきらず 萬よし

夜遅く歸つて水を飲んでゐる 馬行

誰あれ、水のうまさと言ふ飲み 波郎

別れた會ふたも水のあつたそば 長人

末席でもう酔ふたのか水を飲み 夢路

のさを越す水にコップへ齒當り 蹄二

酒の味水の味我れ酔ふてゐる 凡平

心配は水で冷やしただけのこゝ 溪花坊

笹濁りそれがほんこの水の色 輝翠

偽つた水の温さが面白し 文久

水張れば水の中には不平あり 松郎

戯談の水がかゝつた男風呂 松郎
水打つて妻は嫉妬をおさへて居路 郎
悲しさがありく浮いた洗面器 同
せめてもの水も残して眼をつむり 日車
器あれば湛へる水に事缺かず 同

第九支部句會

三月十六日午後一時より山口町新道、吐露樓
庵に川柳會を開く。蛙人、遠柳、遊郎、堤坊
醉頰及吐露樓の熱心家のみの小集、夜に入る
も散會せず。洲馬、幸麿、赤飯も非常召集に
應じ來り、十二時迄に十三題を作句する、今
月に入りて小集例會併せて四回 柳家一同白
熱化しつつあり。(吐)

人 混 み 吐 露 樓 選

人混みを遠廻りする子供連れ 堤坊
雑沓に鳥居の端が少し見え 醉頰
人混みを三味や太鼓で縫ひ歩き 遠柳
人混みに修學旅行列が切れ 遊郎
人混に流れるまゝに押されてる 同

○
背の子が指さす方は人が混み 吐露樓
つい其處に見えて行ける人が混み 同

試 驗 遊 郎 選

試験から歸れば美味しい御馳走 蛙人

試験場を出て校庭の廣いこゝ 同

跡五分だんく近所減つて行き 醉頰

佗住居只子寶に二重丸 同

たまさかに勉強すれば試験なの 吐露樓

母親の心配弟の試験 同

試験場もう天才は立ち上り 同

○
試験場たつた二つの大きな目 遊郎

空 腹 蛙 人 選

雞糞を投げて空腹母を呼び 遊郎

苦且那腹の減らないのを恨き 遠柳

空腹の眼にカフエーの白い壁 堤坊

空腹の兵隊に靴重い事 吐露樓

空腹の子が臺所へ泣きに來る 同

市場、石垣 幸 磨 選

新世帶値切るを市で知つて來る 堤坊

二三把の葱を提けてる金指輪 醉頰

石垣の上から唾を吐いて見る 遊郎

石垣を崩して伸びる柳の木 遠柳

石垣のここから船の人を呼び 吐露樓

安いなま云へ市場で買ひました 同

市場から歸るに狭い臺所 洲馬

石垣に夕日は遠慮無く當り 同

裏門、獨酌 洲 馬 選

裏門には名ばかりの棒二本 遠柳

裏門に送り出される卜女の母 遊郎

振袖が待つ裏門の石つぶて 醉頰

しんみりする獨酌に雨の音 幸磨

獨酌の來そうなものだなと思案 堤坊

夕刊の散らばる中に獨り呑み 蛙人

獨酌にフト先妻の姿なり 同

裏門に立てば遙かに汽車の笛 吐露樓

獨酌に女房の風呂長すぎる 同

何と思ふたか獨酌が唄ひ出し 同

獨酌に又も立たねばならぬ用 同



柳の床柱

省 二 生

吉原へ檣のもちで借りに行き、
 先年展墓に歸省した折り、お寺の前の
 古びた、然し奥床しい家で檣を求めた、
 幼年の時祖母のお伴をすれば、必ず此家
 で檣をわけて貰ひ、老婆と世間話をされ
 るのであつた、こは老婆の佛に對する奉
 仕生活で、今は其志を繼ぐ若細君が賣
 つて呉れる。

自分は永年の放浪生活に、知己友人を
 亡なつて冷たい墓石に香華を手向けた事
 の餘りに多きを悲しむものである、今も
 尙朝鮮に住み、野原に只圖畫された原始
 的墓地に突立つた時、アノ親切な老婆の
 賣つてくれた檣を思ひ出す——そして古

川柳の一句が頭に浮ぶは、不束ながら自
 分の詩生涯を満足に感謝する。

朝鮮に檣が無い、否支那でも用ひぬよ
 うだ『密規に檣の葉を蓮華に代用す』と
 ある、檣は佛ともかく、即ち佛の木で神
 の木が神であるに等しい、印度では四季
 通して蓮華はある、檣も亦常綠灌木に枝
 頭に葉を叢生し香氣も高い、眞言宗の説
 に因るに、果實の形狀が蓮の華に似て居
 るから我國に於て佛の木として用ひたる
 なりこの事、蓮華に乏しい、然も年中な
 い國柄としては尤もなるわけにて、伊藤
 博士に因れば果實は蒼莢にして數個聚合
 して星形をなし、各革質にして熟すれば

ば上部に於て開裂す、種子は壓屈せられ
 種皮は硬く且つ平滑にして光澤あり、胚
 乳は多肉をなすこある。

何人が我が邦に移植したのであらうか
 と言ふに、眞俗佛事論二に供物儀を引い
 て、檣の實はもと天竺より來れり、本邦
 へは鑑眞和尚の請來なり、其形天竺無熱
 地の青蓮華に似たり、故に之れを取りて
 佛に供すこと詳にされてある。

鑑眞和尚は我が佛教史上最も有名なる
 高僧で水鏡に鑑眞和尚と申しし人聖武天
 皇の御爲に招提寺を立て給ひきこある、
 鑑眞俗姓は淳于氏唐の揚州江陽縣の人年
 十四にして智常禪師に就て出家し三藏を
 極め殊に戒律に精し我大唐僧衆寂照の
 請に依り其徒一百八十四人に共に六回の
 大難を犯して來朝す、時に天下勝寶六年
 な、勅して東大寺に居らしめ授戒傳律の
 任を委ね傳燈大法師位を授く此歲四月戒
 壇を盧遮那殿前にたて聖武上皇帝已下
 四百餘人戒をうく、後に其戒壇を大殿の

西に移して戒壇院を立て七年皇子新田部
の邸を飾り唐招提寺を創す、此年大僧部
に任じ大僧止に轉じ天下寶字元年大和尚
の號を賜はる七年五月六日壽七十七にて
寂す、泣雨の時瘴氣に罹つて兩目を失ふ
も大藏の文句暗記する所多し
本朝高僧傳末高僧傳參照の事

櫓か青蓮華に似たりとあつた、自分は
佛教の知識が皆無ゆゑ、二二の僧侶に質
問したが實際印度に渡つて居ないのわか
ら書物に因るより外ない、そこで自分か
知る所に因るこ、天然には四つの蓮華が
あつて優鉢羅華之れが青蓮華である、
物頭華(黃色)波頭摩華(赤色)芬陀利華(白
色)とあつて泥盧鉢羅華を加ふれば五種
となる、書物より抜いてみる

通常蓮華と稱するは芬陀利の白蓮華を
指す此華に三時あり未敷の時を屈摩羅
と名づけ敷て將に落ちむとする時を迦
摩羅と名づけ處中の盛なる時を芬陀利
と稱す

涅槃經云人中蓮華人中芬陀利華
大日經疏十五、三藏說、西方蓮華有多
種、一者鉢頭摩、復有二種 一者赤色
即此間蓮華也、二者白色、今此間有白
蓮是也、非芬陀利優鉢羅亦有赤白二色
又有不赤不白者、形似泥盧鉢羅花也、
俱勿頭有赤及青二種、又云俱勿頭是蓮
華青色者泥盧鉢羅、此華從牛糞種生、
極香、是文殊所執者、自謂青蓮亦是此
色、更有蘇健地迦花、亦相似而小花芬
陀利迦花可有白葉、葉々相承圓整可愛
、是外葉極白、漸向內色漸微黃乃至是
在內者與尊色相近也、此花極香也、昔
琉璃害釋也時、大迦葉於阿羅漢池取此
花裏八功德水流之、諸女身心得安樂、
命終終生天、因是投花於地遂成種至今
猶有之花太可愛、徑一尺餘尤可愛也、
此法華所引中者是是漫荼羅八葉者也

之れを讀んで櫓を思ふ時に、妙趣盡きぬ
ものがあつた。

知名抄の『之岐美』本草和名の『之岐
美乃木』又各地方に伝つては、はなしは
(日向)かうしは(遠江)まつこ(伊勢)おは

な(美濃)はなのき(安房)はな(東京)この
稱呼もあるそうだ、そして日本支那印度
北アメリカに分布されて居るもの十二種
に及ぶ、一名香葉とも云ふ如く、其葉
其枝其實は支那に輸出され、大茴香(藥
品)となる、或は抹香線香の料となる、
此の香氣も佛教の關係は見逃す事が出来
ない、又『あしきみ』と唱ふるは、シキ
ミンミバ毒素がある所以、枝葉を碎き
淀を河に流せば魚類を殺す、聞く所に依
れば、昔時死體を埋葬を狼なぞが荒す
ので、櫓をたて置きしに其有齒成分の
爲め、狼が斃れて居た、爾來墓前に供
ふるやうになつた、これ猛毒を左證さ
ならう、此の毒を有する事も亦佛教と面
白い關係があるのである。

能く賣れば實る程淋し切櫓 武玉川
吉原、櫓の元手借りに行き、吉原三櫓、
爰に無限の川柳味と時代相が現はれて居
る。(彼岸の中日に)



川柳界の事ども

川柳家、川柳社と機關雜誌、川柳作句會
川柳の價值、作句會に就て

塚 崎 松 郎

川 柳 家

よく私等がいつも『川柳家』といふ言葉を使ひます。があれは川柳に興味を持つて川柳の作句をしたり、川柳の批評をしたり川柳の雜誌を發行したりする人々を指して云つてゐる言葉なのであります。例へて云へば畫家とか小説家といふのと同じ事でありまゝ。けれども川柳家は、畫家や、小説家のやうに本職的人々はまだ無いのでありまして川柳家は川柳に親しむ人々を指しての便宜上の名稱であるといふことを知つておいて貰へばよろしいのであります(以下川柳家といふ文字を用ふるのにはこうした人々であるといふ觀念で讀んで頂きます)

川柳社と機關雜誌

川柳家の中には有志が集まつて一つの團體を作つてゐるのがあります。そしてそれ等はみな、川柳何々會、何々社といふ名

稱のものに同人の各自が、夫々主義主張を持つて或は機關紙を出したり、研究會を開催しては川柳の向上につめて居ります。或が川柳雜誌も本誌奥付に記載してある同人によつて結合が成り本誌を發行してゐるやうなものであります。其他大阪には、番傘川柳社は番傘を大阪川柳社は大阪さ夫れど機關紙が出ております。尙東京其他各地方にも、之等の川柳團體や、川柳家が澤山あつて、機關雜誌も相當に出ております。

川柳作句會

川柳家は毎月の様に川柳の作句會(單に川柳會とも稱してゐます)を開催致します。作句會は各團體の會又は社の主催で一般的に開催するのを、例會(川柳雜誌社四月例會の如く)と稱し、數人の有志が集まつて作句をするのを小集會(松郎居小集の如く)と申しております。また川柳に就ての種々な研究會や

春秋の頃等には、花見句會や、觀月句會等の名に於て特種な催しや、吟行をやる事もありました。尙又川柳壇を設けてゐる新聞社の主催で何々新聞社川柳大會又は川柳講演會といふのも時々催されます。この外「回覽誌」もか、五句集も云つて、數人が各自三句なり五句なりを出句したものを、批評し合つて回覽するといふ研究方法も行はれてゐます。斯うして各川柳家は個々の外に之等の會に寄つては趣味を味はひ、交誼の結晶を續けるのであります。次に席上及誌上の、選、といふ事に關しては本社主幹麻生路郎氏が本誌第一卷第八號に「選及び選者」といふ題で詳しく述べられておりますから就て御覽下さい。

川柳の價值と讀者の諸氏へ

川柳の價值、といふ事については讀者の諸さんは、例へ句を作つて居られない方でも、本誌や其他の誌上等にて充分お會得が行かれて居る事と思はれますから、私が事柄しく申すまでも無い事です。が、本誌の主幹路郎氏は本誌創刊號に於て「私に言はせれば、川柳はその一人一人の人格の發露でありその一人一人の歴史である。延いては社會の縮圖とも云へる。川柳一句は個人の作であつても、その個人の作品の中に社會を見るこゝが出来るところである」と述べ、又「現代人の思想にびつたり觸れた詩」云へば川柳の外にはない」とまで云々され、更に「我等は此の川柳によつて人生を的確に批評して行きたい」と主張されてゐます。實際我々川柳家はみな、路郎氏の云ふ如き、主義主

張の基に川柳を愛し、且つ川柳文學として後世に残すべく句作に努力して居るのであります。で本誌の愛讀者の諸さんも永遠に熱の冷められる事のない様に川柳を愛し、尙未だ作句をした事のない方はさうか、あなた方人生の歴史を川柳に詠まれ、共に多くの名句を後世に残し大正の川柳史に光彩を添へられん事を祈る次第であります。

作句會に就て讀者の諸氏へ

次に諸さんの中に未だ句會に出席された事のない方は是非一度本社の會なり、其他の例會へ御參會なさる事をお勧めします。作句會は多數の人達が集まつて作句し研究するのですから、お互ひの向上に資するのであります。皆の作句したものは、一句々々披露者によつて讀みあけられるのですから、一同の人の句が聴ける譯であります。従つて滑稽な句には大笑を洩らし、皮肉な句には微笑禁ぜず、或は穿ちの妙をたゞ、深刻胸に迫る句に襟を正しなさり、人の人生觀社會觀の句に接し、居乍ら現世の一大パノラマを目前に味はふ觀があり、興味盡くこゝなく意義有る時間を過ぐるのであります。句會は初心者や初めての參會者は最も歡迎致しております故御遠慮なくお餘暇のある限り盛んに御參會が願ひたいのであります。尙參會されたからといつて必ず作句せねばならぬ事はありません、一句でも二句でも出来れば出句せばよいのであります。それに没になつたのは作者を發表しませんが恥しいといふ事はありませんし作者

の名は入選した句に限つて發表するのですから、そういう場合には寧ろ得意顔でおられるのであります。初めての方にして一句二句入選した時の感じは云ひ表す事の出来ぬ快味に接するのであります。尚そんな感じは無用ですがもし初めて一人行くのが氣まり悪く思はれる方がありましたら、本社が私宛御一報

願へばお供を致します。
本社の會は毎月ありますが、この月の例會は別項記載の如く四月十九日でありますから、お一人でも又は同好者お誘ひ合せの上御參會下さる事を望みます。甚だ散慢な事のみ申上げましたが一行なり諸さんの御參考になれば幸ひ存じます。

消 息 (一)

▲金澤の左記川柳家諸氏が山陰山陽を経て九州四國方面へ旅行されました。そして左のお便りを頂きました。

出雲大社一ノ鳥居の繪葉書にて

大社詣りの歸途自動車中一美人と同車し、いやちこなる御利益に驚き申候

(銀波樓)

今大社から歸ります。二十七日午前八時半(鬼絲子)

出雲大社印繪葉書にて

この一行に光林坊も加はつてゐる事を御記憶を乞ふ(光林坊)

逢へぬのミ味噌汁の吸へぬのがつまらない、大阪へは廻らぬさうだから御

機嫌よう(紋二郎)

大社までは海に沿ふてゐてよかつたが小郡迄は山ばかりで……(紹月坊)

よせ書きにて

初めて九州へ洋行して下ノ關がら門

司へ汽船に乘りました(紋二郎)

今晚(二十七日)は九州へ上り小倉に

泊りました。(鬼絲子)(銀波樓)

廿八時間の汽車の苦を小倉で洗ふ

(紹月坊)

宮幣大社宇佐神宮の繪葉書にて

今朝別府を立ちました。今から宮島へ渡つて明日あたり四國へ参ります。

龍田川丸にて(鬼絲子)

▲造花の櫻を見て「ア、櫻は陽氣な

アと思ふ程にはなつてましてもいまだにお寒う御座いますが、きこもお障りは御座いせんか、私事お陰様で今も新婚の甘い氣分に浸つては居りますけれど……。浪花座の肺病が二人も出る割にはさう面白くない黎明云ふお芝居に當てられましたのか、此三日何んだか氣がメイツテしかたが有りません故、稻荷會か吟行か何かこうわアツミ云ふのを是非お催し下さいまし先はお伺ひまで(かほる)

▲郊外の大空向いて吠へに吠へ、紋太お辨當無難で歸り祖母案じ、濁水。外の寄せ書きを頂きました。

(以上二六頁へ)

募

集

句

校長

大島濤明選

▲校長といふもの

名物の一つ校長の長い鬚 眠聲
和服着の校長さ會ふ日曜日 琴月

校長も妙な仇名の数に入り 時雨郎

校長の校長らしい歩きやう 濁水

校長は謹嚴な髭ひねつて見 柳暉

校長さ小使同じ年であり 駒人

出世といふ校長の髯が伸び 凡平

(佳)校長の鬼も角輕い咳を出し しける

▲校長の威と徳

校長の聲が震へる御名御聖 琴月

校風さ共に校長名があたり 正坊

小使室校長からのベルが鳴り 一路

校長をはつきりさ見る勅語すみ 山美

(佳)校長の一人舞臺の式であり 同

(佳)民衆さ伍せず校長別な椅子 吐露樓
(佳)校長の机に小使暇が要り 隨帖

▲校長さ生徒

校長が來たさささ小聲なり 山月

卒業證校長の手を見て下り 喜泉

校長は一年生に恐はがられ 俊翠

大体に於てさ校長叱るなり 黎明

さん附けにして校長の名を知れ 乾坤

級長になつて校長から知られ 時雨郎

おづさ校長室の扉をあけ 柳暉

(佳)校長の訓話がすんだ驢がし しける

▲校長さ父兄

校長へ恭しくも猪口が行き 駒人

校長が見へて茶が出る蟹が出る 愚劣

校長の奥さんも居る父兄會 木屑

川柳家の戸籍調べ

◆ 係馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)きらひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(一) 相元 紋太

(一)相元文之助(二)紋太(三)定まりたるものなけれき昌木二八を時折使ふ(四)神戸市花隈町四七八(五)明治二十三年十二月六日生(六)菓子商(七)だんく数が多くなつて特に一句を擧ぐる能はず、あたゝかい心持の句明るい性格の句皆好きなり(八)例を早速挙げ難いが暖い心持明るい性格の女皆好きこんな女藝人に多し但し實際に私の本能(?)を惹きつける女は瘦つほちの眼の大きい餘り人に好かれさうにない女に多いから嫌になる(九)今一寸見當らぬ(一〇)何にでも趣味を持つ事

校長が正座で村の謝恩會 誠司
父兄會校長に會ふことになり 凡平
(佳)校長の友達といふ父があり 柳人
(佳)校長へ頼みに行くも母で。 駒人

▲校長の悲哀

もう大分古い校長さんの服 時雨郎
運動會校長さんも 走らされ 吐露樓
(佳)老校長はくゝ鶏を飼ひは。 突支坊
(佳)運動會校長椅子に草臥れる 喜花
(秀)詰襟を着て校長の二十年 佳鳴

夜櫻

驗井美の作
麻生霞乃共選

美の作選

夜櫻の今宵限りの雨さなり 佳鳴
夜櫻の此處でも籠の鳥を弾き 黍明
夜櫻の埃りをはたく暗い街 乾坤
夜櫻の支度軍筒を混ぜ返し 山月
夜櫻に成つたも知らぬ蝶々が居 木屑
夜櫻に雪洞一つ消へたまゝ 紅短丹
夜櫻は逢つた二人に明るすぎ 山美
篝火に絶へず夜櫻散りかゝり 時雨夜

櫻にちみ窮屈な母が居て 喜花
夜櫻に一人見られる宿の下駄 同
夜櫻へ今夜の月のすねたやう 凡平
夜櫻へ女は女だけの趣味 同
電車賃だけで夜櫻歸つて來 琴月
吸ひよせるや、櫻へ灯が這入り 同
飲んでゐる中に夜櫻灯がこもり 同
(佳)夜櫻を見に巾着を臍に當て 松郎
(佳)くゝミ酩酊グラス櫻の灯 同

霞乃選

夜櫻に誘ふ仲間の企みなり 乾坤
すひよせるや、櫻に灯が這入り 琴月
氣晴しに行く夜櫻の雨さなり 元山
夜櫻さなつたも知らぬ蝶々が居 木屑
夜櫻へ母も一緒にいくつもり 駒人
夜櫻に一人來たのが物足らず 山美
夜櫻を見がてらさいふ里の母 黎明
電車賃だけで夜櫻見て歸り 一路
灯がついてからが祇園の櫻なり 凡平
夜櫻へお供も同じ 調なり 吐露樓

が出来る性質に自分では思ふが扱特に云ふものなし、人間味の多きものを最も喜ぶ、如何なる趣味も究極は川柳に還元する(一一)有(一二)鱈汁、あかゑひ、眞實の喧嘩、人を況ふ心(一三)明治四十五年春頃初めて句會に出た、その二年前に狂句の心算で川柳を作つてゐた事がある。

(2) 麻生路郎

(一)麻生幸二郎(二)路郎(三)約二百ほざあり、遅日莊主人はその一つ(四)阪神沿線鳴尾(五)明治二十一年七月十日生(六)著述業(七)古人の句現代人の句小生の句等にかなりあります。一寸例にあけ惡くし(八)概して愛嬌のある女、瘦せてゐるより、心もち太つた女、あまりに理智でない女、嫉妬心のない女、僕に趣味の合致する女、僕の性質の足らぬ點を知らずく補つてゐるやうな女、眼は大きい方鼻はあまり高くなくても、こゝろよい感

夜櫻を見に来る丈の神社にて 同
夜櫻を見に夕飯を早く食べ 眠聲
城跡云ふ夜櫻へ灯がさもり 同
夜櫻の雪洞一つ消へたまゝ 紅短丹
夜櫻に妻は一櫛入れて出る 同
なみくみ酌ぐグラスへ櫻の灯 松 郎
(軸) 出語りがあると思ふ櫻の灯 葎 乃

小 噺 二 三 松 雨 生

○面の皮がうすい
○「貴様程面の皮の厚い奴はない」
△「サー元は厚かつたんですが悪ずれに
すれて此頃はさんご薄うなりましてナ
ア」
○既に去年喰ひました
むろ造りの珍品を御馳走して「何んぞ今
頃珍らしくろうか大いに味はつて喰つて
呉れ」△「此邊は馬鹿におくれてゐます
チー僕の國の方では既に去年喰ひました
よ」
○大阪の大字
大軌書いてならゆき振假名の付いて

夜櫻を見にお拂ひの悪い客 同
遠廻りして夜櫻を見て歸り 佳 鳴
夜櫻も今宵限りの雨となり 同
艶歌師の肩へ花片散つて来る 同
酔ふてゐるのが夜櫻へ手を伸し 同
(軸) 出語りがあると思ふ櫻の灯 葎 乃

居るのを見て「お父さん大阪の大字ミ
奈良さいふ字は同んなじだんなア」
○此中へ入るべからず
マクスをかけた男マクスのふちに小さく
「はいきん此中に入るべからず」
○荒木の茶屋
荒木さいふ小さい村に一軒の茶店があつ
た看板に曰く「酒肴あるききもありない
時もあり」こそそれ以來有名になつた
○して今宵の宿泊は
漢語便覽ミ仇名の付いた郡書記があつた
「君如何にして此坂を越へしやして今宵
の宿泊は」

じを與へる女、化粧は薄化粧、衣裝はよ
くなくても色彩の調和配合の巧みな女、
健康な女、この項云へば無限なし(九)最
近では、父の死後轉々として落ちてゆく
(一〇)園芸、漫語、芝居、落語、等等等
(一一)有、妻の若き頃の句に「繋ぐ手のは
づかしい程月が冴え」の句あり又「ヘル
メットかむれる君の年すこし老けて見ゆ
るも頼もしきかな」の短歌もありき、こ
れ皆餘程以前のこと故憶氣にもあたるま
じければ記しておく(一二)甘いもの、但し
戀は別(一三)明治三十七年の晩春。

(4) 井上 凡 平

(一)井上吏郎(二)凡平(三)紫露雨、山松
(四)大阪市北區北同心町二丁目三六〇柴
田方(五)明治三十二年六月八日生(六)店
員(七)太陽にすまない書をぶらり出る、
刀三(八)一人あるが云へぬ(九)ナシ(一
〇)相模(一一)配遇ナシ(一二)人參葉の
お浸しミ日本鬚のびんつけの句ひ(一三)
大正十二年五月

句

評

松路郎

本號「近作柳樽」の中から新進作家数氏の力作を選んで二人で句評をしました。初心者の句作上の参考になれば幸ひです(路)

自分だけ時間を守る椅子に掛け

一閑子

松郎評

サラリーマンに對するその日常の動作を深く内面的にこれを冷靜に描寫した句である、でこの句、作者は主觀を表したのであるが、私はこれを客觀的に味はつた方が面白いと思ふ主觀的にみるべきは現在與へられたる生活の途に何の不平もなく平和に所謂、事を足るてう自個感念を持ちつゝある一サラリーマンの態度を描寫した。こいふ一事件を取扱つたこいふ意味も、一つは俺は只與へられたる勤務時間を送つて居ればいいのだこいふ様な一種の使用人の現代思想的なひがみの意味が含まれてゐるこの二つの事件がこの句の本質となる。之れに對して、客觀的にみるこ前記の意味を基として、更にこの想を對照して之れの反對な不平や、過敏な心理の反省を結合した感じが表れ、又は自分だけ時間を守る椅子に掛けてゐる人物を悲哀的に皮肉に人情味を加へた觀方ともなつて句の價值を廣くすると思ふ。

路郎評

冷やかな人生觀が出てゐるところにこの句の生命があると思ふ調子もすら／＼巧に詠まれてゐる。この作家は近來あまり句數を見せないけれども、昨年の近作柳樽には随分い

ゝ句があつた。例をあけて見る

讀みさしの本を抱へて鶏を追ひ
だん／＼春になつてく帽子掛
心だけ世帯以上の禮を提け
手にかける子なきを母は淋しがり
一つ宛買ふのが子供いゝ見ね
子が死んでからの木魚に念が入り

なこである今後を期待してゐる作家の一人である。

路郎

松郎君の評ではサラリーマンが勤務先で、他人は時間を守らないのに自分だけが時間から時間までを平たく勤めてゐるこいふ境地を詠んだやうに解釋してゐられるやうであるがこの句は、さうした方面を詠んだものであつて、ある席、それは講演會でも招待せられた席であつてもいい。こにかく、ある席へ行つたところが自分だけが時間を守つて來た唯ひ椅子にほかんしてゐる莫迦々々しさ、他人の時間を守らないのに不遜をもち、しかも自分の莫迦正直さを思ふて自嘲した句であらうと思ふ。作家は若い純な心をもつた人であり、時間的觀念のある人であるだけに、この句の生命が躍動してゐるのだと解釋するのが正當だらう。でなければ自分だけ時間を守つたこいふここの面白味がなくなる。

松郎

お説によつて私の解釋がちと遠くなりました。そしてお説の如くの解釋が、いゝやうに思ひます。けれどもそれにしては、時間を守る椅子に掛け、は時間を守つて椅子に掛けてゐるこはこれないと思ひますが、時間を守り椅子に掛け、こするこ

ころだと思ひますがさうでせう。

路郎 これは技巧の問題であつて、自分だけが時間を守るに
いふところの椅子に掛けたので表現の方法に一種の省略が行は
れてゐるを觀るこゝが出来ます。守る椅子に掛でなく、守るま
で、がその作家の態度で、それ以後の椅子に掛けるは作家の動作
である。守るまでとそれより下の齟齬を切り離して見なければ
ならない。これは短詩形の缺點かも知れぬが、この缺點は多少
大目に見てもいいと思ふ。

松郎 つまり、自分だけ時間を守る、椅子に掛け、すね、
成程よく解りました。

君の椅子まだそのまゝに君を待ち

眠 聲

松郎評 病める友へ、と題してあるので更にこの句の價值が
高まる。題がなくても獨立する句である事は云ふ迄もない、病
める作者の友がこの句に接したときは例へ其友が川柳家でなく
ても其の感は如何であらう。作者よりも寧ろ川柳に泣かされる
であらう。題言によつてからうじて判る句や、題言がなくて認
められぬ句が多くある中に、此句の如き、題言によつて更に價
値を高める句は少い。

路郎評 この句には「病める友へ」といふ前書がついてゐる
川柳家は所謂大家と云はれてゐる人達でも前書の句には餘り佳
句を見ないが、この句なさは實に前日の句として上乘の作と云
つていい。斯うした句に成功したのは、この作家が頗る眞面目

であること、その友情が自然に流れ出てゐるが爲めである。
この作家は近來めき／＼進境を示してゐる。最近の佳句二三
を舉げる。

おこゝひの今頃呑んでゐたものを
あれ以來娘は僕をよくたづね
東京でなくとも苦學こゝでぜよ

路郎 松郎君の評の中に題言といふ言葉があるが、これは前
書といふ言葉を用ひて貰ひたい。俳句でも川柳でも從來さうし
た適當な言葉があるのですからこれは句の解釋外であるが一言
して置きたい。

言ひ過ぎたあとで優しい氣にもなり

乾 坤

松郎評 この句、表現をも少し深く突込んだものしてはしか
つた即ち、あとで優しい氣にもなり。の「も」がやゝ平凡の域
を脱してはゐるが、優しい氣にもなり。は餘情に置き、言ひ過
ぎてから、の一の動作を表した方がよいと思ふ。それは言ひ過
ぎたといふ事件に、其人物を描き、其の後の動作に風俗を表し
て、優しい氣にもなつた。といふ點は餘韻を含ますからである
路郎評 人情の機微を穿ち得た句であると思ふ。「海彦山彦」
の海彦の心もちを掴んだ句である。難を云へば多少句に弱さ
がある位なもの。作家にも

一藝に秀で身持を惜まれる

の佳句がある。將來ある作家である。

路郎 松郎君の評の「も」が平凡の域を脱したいふ解釋には

同じ難い。むしろ「も」はいや味である。私が前に難を云へば多少の句に弱さがある云つたのは、この「も」が、この句の句意を非常に弱めてゐたのであつたのを漠然と指摘したのであつた。松郎君の評を聞いて、その弱さが、はつきりしたやうに思ふ。松郎君のいふ「優しい氣にもなり」を動作で表せば、もつと強い良い句になるといふ意見には私も賛成するが、そこまでのぞむのは無理かも知れない。

さてそんな氣であつたのかあ、嬉し 元 山

松郎評 事件をはつきり表さずに、しつかり表現したところに手柄がある。川柳はなるべくこんな風に、すら／＼と軽くそして内容のふくらんだ描寫でありたい。

路郎評 随分自由に詠まれてゐるのが愉快である。強ひて難を云へば調子が軽すぎるためにやゝ輕薄に感じられる位なものである。この作家はまだ若い人ださうだが「昨年近作柳柳」には非常に多くの佳句を発見した。

此調子で行くに嬉れしい取引所
うちの子のまねは出来ない隣の子
そんなこゝが恐しくてまだしあはせだ
元氣よう障子あけるに誰も居ず
百萬圓御座候の店構ね
なごの句を讀んでゐるに到底三十二の若さではない。

風呂敷で包んだだけか下女のもの 佳 鳴

松郎評 下女といふ人物のほんの一小部分を川柳に詠んだま

で、餘り感興がない様に思ふ。下婢に對する侮蔑的にも取れるやうで斯う云ふ批評句は現代にも副はぬやうに思はれる。

路郎評 淋しい句である。いゝ見つけたと思ふ。斯うした平凡な取材を巧に取扱つたところにこの句の價值がある。この作家は作句をはじめから比較的新しいがこんな句を見せてくれるのは大いに愉快だ。この調子で進んで貰ひたい。

路郎 「下女といふ人物のほんの一小部分を詠んだまで、ある」といふ評は酷ではないかと思ふ。私は一小部分でもいい。それが巧に描寫されてゐれば句としての存在は充分だと思つてゐる。そして侮蔑的に取扱つてあるやうに解釋されてゐるが、私はむしろ、同情の眼で見てるものと解釋したい。下女の句は古句にも随分澤山あるが、こんな方面から觀察した句は稀だと思つてゐる。

松郎 私のいふ侮蔑的に取れるといふ解釋ミ、お説の同情の眼で見るといふ解釋ミに分れる。即ちこちらにも解釋がつくといふのがこの句の表現に難があるのではないでせうか、この表現から行くミ、こちらの解釋でもよい事になると思ひます。それでこちらかの一方の句にしやうと思ふミ表現を變へねばならぬと思ひます。この句表現なり調子は、すらりつゝ詠んであるのに句の意味がしかも正反對いづれにも取れるといふ句は一寸珍らしいと思ひます。

路郎 正反對いづれにも取れるれといふのは從來の川柳に對する態度での囚はれた批評のやうに思ふ單に下女の持ちものは

風呂敷包一個に過ぎないといふ侮蔑の立場からこの句を詠んだものさすればお説の如く頗る拙らない句になつてしまふ。が、今日の川柳家といふものは川柳の作句態度なり川柳觀なりが餘程變つて來てゐる。下女の句といへば直に、罵倒したり、侮蔑したりしたものさの先入主で解釋すれば、さんだ解釋になつてしまふ。私はこの句には、もう少し深いものをもつてゐると思つてゐる。

松郎 それによつて私の觀方がお説の如く從來の川柳に對する態度の囚にれた批評である。こゝは認めました。がこの句のまゝでは同情的に觀るさいふ描寫になつてゐないのがさうまで恨みです。お説の如く、句は成る程溫味の眼で見ねばなりません。

淋しさは指輪のあとへ残つてゐる 愚 劣

松郎評 榮枯盛衰さいふ部分を詠んだ句と思はれるが私には餘り感興が起らぬ。

路郎評 下五で調子にゆるみを感じさせる。今少し引きしまつた句になればなき、慾を云ふて見る。しかし何んもなく棄て難い句である。この作家には、この句よりもつさい、句が澤山ある。その一二を擧げるこ

淋しさは乗せて残して汽車はたち
女親流石そこへは油断せず

慈だけが濡れるがまゝに放つてあり しける

松郎評 字句の通りなれば單なる寫生句であるが、私はこの

句の餘情を取る。寫生は斯ふ云つた餘韻餘情の働きを必要とする。

路郎評 こうした靜かな句を私は嬉しく味つた。川柳だつて滑稽な句ばかりでないさ云ふ例證である。斯うした境地を發見するには、この作家はあまりに若い人であるのも嬉しい。將來大いに伸びる作家だと思ふ。この外に佳句も随分ある。

我が物であればと思ひ縫ひつづけ 一 休

松郎評 よくある柄である。一寸誰でも見附け處である。しかし斯う云はんとして作つては見るが、修辭や調子にそこかに難があつて失敗に終つた作者が多かつたと思はれる想であるまた古く作つて來た人達はなんだかこの種の想は一見幼稚の儀に考へて一句に對する事を躊躇するさいふ感念がある。そこで私は常に云ふ新進作家は何でも大膽に想を擱む結果、失敗の句も多いが斯うした古い作家が手をつけ得ぬ事を捉へて調子さへよければ斯うした堅まつた句になる。調子に最も成功した句は斯う云ふ句を云ふのである。

路郎評 この作家には、斯うした作家周囲や生活環境を巧に描寫した句がかなり澤山ある。「イエー」皆他處はんの仕立物一の如きもその一つである。こんな方面にぐんぐ伸びてゆくこの作家の將來を矚目してゐる。

やれくミ欄外すも母であり

なきもい。

消 息 (二)

▲陽春四月の候も近うなりました。御身に御變化はありませんか、今週番を勤めてゐます、却つて香氣過ぎて川柳も作れません、歸つてから又よろしく。イスバノシーザ三〇〇馬力の組立も略終つて三

戯 作 ちよきく バコー生

× 川柳の

話し乍ら、

散髪出來る

チヨキく

×

兄の悟郎に

弟の十字路

ほんにおこなし

川柳家

チヨキく

×

「川柳雑誌に」



川柳塔

黒木 英豆

○

○

御家は安泰ミ蘇鐵かしこまり
黎明を望んで保養してゐます
連れの無い花見君子の如くなり
かまはずばもたれ給へかこの胸に
ちよひねたばかりにみゐる久し振り
意地張つた儘シャボテンの育ち様
春來れば石地藏からありがたし

高橋かほる

オートパイ櫻の花を散らす也
繪封筒がチヨイくこ來るビルヂンク

セルのはねもみく、春の風をうけ
自轉車屋やもめに見えて薄暗く
儼番があつて田舎の心持ち
さんぐりの溶ける工合も春らしく

西垣 松雨

世間體丈けはかぶりを振つて見せ
氣忙しい程動いてる二本針
學校を目あてにパンの店を出し
サツミ來た雨に松葉の色は冴ね
花道へ仁木彈正生ねた様

○ 岩崎 柳路

口髭の倅を母は使ひ兼ね
芋助はいつも酔つてる様に見え
卵屋を真似て丁稚の見る卵
エレベーターさつかでベルが鳴つてゐる
巡回の巡查も聞いて居るラヂオ
汐千狩の娘カメラの前をさけ

「番傘」に「大大阪」

ほめる斗りで

なんとも云はぬ

チヨキ〜

×

悟郎笑へば

十字路も笑ふ

笑ひ乍らに

散髪出来る

チヨキ〜

型の他に四型の雄大な飛行も近い内です
う。(小田浩仙)

▲金澤兼六公園旭櫻の繪葉書にて「私は
店のウインドウ會、アスは山中行、水府」
ヒヨツコリ來ました。今梅の盛りです。

(夢路)

疲れた頭を喜ばして呉れるものはみなさ
んの御消息です。

御旅行先の印象なご嬉しいものです、お
待ちしてゐます(路)

高歩で借つて迄よくの手切金
洗濯屋カフエーの附見けつ出し
商用に裏新町を通り抜け

○

駒井美の作

電燈に一番で立つ飯を喰ひ
口入屋薄く塗らせて連れて行き
まだ生きてます蟹賣ち嚇し
手の筋に苦勞を撥のたこを見せ
朝顔に塀の電燈消へ残り

○

森田輝翠

能く寝れば寝るゝて母は氣を揉んで
たんまりと吞ませた母は着替へて出
煩囂りをしたので子供泣き直し
明日からは逢へぬ行李の紐を締め
ほころびを縫ふて貰ふに氣が咎め
スボンヂに似て輕石のちと堅し

編後記

◇春、春、あらゆる生物の氣を浮き立たせる春がまた巡つてまいりました。我々趣味に生きるものもお互に心よい時候ではありませんか。世間では花だよりやら、踊りだよりに浪立たせます。常地大毎主催の天王寺博覧會もすばらしい景氣です。この博覧會の催しの中でも『文藝の大阪』は我々にまつ深い憧憬を思はされます。

◇その『文藝の大阪』會場には、種々な大阪に關する書畫や、著作物が出品されてありまして、中にも本誌主幹麻生路郎氏が著はされたお馴染の『漫畫漫文川柳懷手』が、木谷蓬吟氏によつて出品されてあります。木谷氏からは『川柳雜誌』もこの事でしたので、本誌を御送りしたのですが、會場に限りがある都合上、同氏から『川柳雜誌』も出品する筈の所書棚が一ぱいで止むを得ず十三氏の分を割愛しました。そして川柳派の代表者

置床に栢鳳はちこ過ぎてゐる
自治論に這入つて協議纏まらず
まだ一人ですわは女給横を向き
いつのまに來たのか後から抱へ
踏ん張つた力粘土にまだ残り
徐ろに見れば磨きがまだ足らず

○

塚崎松郎

眼ざめれば戀人でなし衣紋竿
一度來て呉れ子が笑ふやうになり
廓を流す爲に習ふた三味で無く
敵娼や汝それ程眠たいか
封筒の裏面へ嘘の書きはじめ
向ふから來る憎まれてゐる先生
御隠居に逢ふこあんたは誰方様
流れの中の砂のきらめき見て仲仕
結果からみればあなたの説になる

井 歡迎句會

日時 四月十九日午後六時
場所 大阪市南區清水町停留所西入

端の坊

兼題「壁」三局 路郎選

會費 金貳拾錢

句會に出席したこゝない人でも御遠慮なくいらつして下さい(幹事)

の便りをも預いて居ります。川柳雜誌の出陣されないのは右の事情ですから宜敷く御承知置きを願ひます(松郎記)

▲ほか／＼して來ましたね。編輯室は頗る賑やかです。今日は毎主催の中等學校の野球の決勝戦がある、春期の競馬がある、とても素的に賑やかです。

赤鉛筆の先減るに伴れ更けて行く

○ 關本雅幽

商ひにそれだけ凝つて貰はんか
年を取る事は私も知つてます
若芦の上へ肥舟うねつて來
青松葉喰ふこまではまだゆかず
譽められて居て一生の御奉公
理に勝てずして佛壇の火を燈し
話せない男に鍵は持たされる
待ち兼ねる時計何度も捻を掛け
種蒔いたまゝに大阪さなり
喧嘩する程に世帯が締つて來
○ 林田馬行
親の金今日も輕々しく費ひ
泣いてたよなごみんなで責めに來る
嫌ひも好きも云はず海碧し

▲何んでも賑やかに愉快に發展して行きたいと思つてゐます。せいゝゝ同趣味者をお紹介願ひます。

▲こん度は大阪市の市區改正で、同人の住所に大分異同が出來ました。左に

港區八條通二丁目橋本二柳子○此花區四貫島二〇二木幸堂○東淀川區南濱一八二西恒松雨○住吉區安立町五丁目一二德田双柳○西淀川區鷺洲町海老江一二〇岡上晴繁方太田徹底郎○東成區中濱町三五〇高橋古城山○住吉區濱口町三三六竹内多聞○住吉區平野梅ヶ枝町五丁目松本助六○住吉區天王寺町下ノ森三五〇森田輝翠○港區鶴町四丁目・三嵐山方

▲井上劍花坊氏は東京市杉並町馬松原五四七へ移轉されました。

▲同人總井花童子氏は四月五日頃私用にて仙臺、東京、京都を経て來阪せられる由お便りがありました。多分本月中旬になるだらうと思ひます。別項案内の通り歓迎句會を開きます

▲同人橋本二柳子氏岳父去る四月一日長逝されました、お悼みいたします。

逢ふて詫び手紙で詫びて嫁にゆき
妹を抱いていつもの辻に立ち
朝寝して隙間の多い家を知る
人混みでひそかに好きな顔を選ぶ
そと聞けば僕も墮落のうち云ふ
淋しさは慕ふ人から金の事
喋べらしておけば賢い事を云ふ
轉寢の蝦放り出せし形なる
赤い帯締めて喋べらぬやうになり

○ 橋本二柳子

來年も來うかと思ふ宿の晝
偽つた奴が成功してゐます
この地圖で見る日本の狭い事
待ち兼ねて茶漬で先に食べました
ほきこしの氣で墓口を鳴らすなり
行末を案じて來るは國の母

▲前號に一寸書いておきました同人塚崎松郎氏が大阪府立圖書館の藏書目録中の川柳が狂句ミして分類されてあるのを「川柳」に改められるやう交渉した結果、今度「川柳」して分類されるやうになりました。

▲主幹麻生路郎氏お令閨霞乃女史は本號編輯前日の四月四日朝に芽出度く女のお子さんを分娩されました。編輯に來た健吟家の松郎氏が早速「産聲につれ麗かな日が續き」歌句つて、うまいだらうと一人で自惚れたのも芽出度き極みです。

▲斯うした内々外の、陽氣な五日本社樓上に於て主幹三二柳子、松郎及び私共で本號を編輯しました。この日晝過ぎに雑誌「世間」の三好正明氏と、本紙の表紙繪を毎號お願してゐる漫畫家吉岡島平氏が所用で來社されました。三好氏の氣焰や島平氏の洒落が共に編輯室を賑して下さいました。(馬行生)

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて半丁も行かないところにある古本屋です。

▲主人公藤堂氏は愉快なおちさんです。とても古本屋のおちさんとしては珍らしい人です。

▲古本を流りながらいろんな話をしてゐれば道頓堀を歩いて來た感じが流れるやうに出て來ます。

▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へること云ふこと買ふさか買はぬさか云ふことを問題にせずに愉快に本を見られるといふことです。

▲せいぜい主人公とお馴染みになつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出来るだけ便宜を興へて貰へます。(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』に封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第二卷第六號課題

四月廿五日締切
(各題二十句以内)

▼埃り 伊東夜乃郎選
▼洗濯 高橋古城山選
▼逢戻り 塚崎松郎共選
森田輝翠共選

第二卷第七號課題

五月廿五日締切
(各題二十句以内)

▼床上げ 石井省三選
▼釣瓶 龜井花童子選
▼斷落 橋本二柳子共選
岩崎柳路共選

每號募集

▼近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報) 編輯局選
▼文章(評論研究吟行漫文)

價定

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓(共稅郵)

料告廣

特等一頁 拾拾圓
普通一頁 拾圓
同號一行 貳貳圓
五號一行 貳圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年四月十日印刷

大正十四年四月十五日發行

第二卷 第四號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

印刷所 藤本兄弟社
大阪市東區農人町二丁目七番地

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所 川柳雜誌社

振替大阪三一五一四番

店書棚賣

(大阪) 明文堂 公立社 柳屋
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

いろは順)

麻

森田輝平	宮内一洲	麻生葭乃	松本助六	矢田右大臣	宗清夜調	竹内多聞	高橋古城山	太田徹底郎	龜井花童子	西垣松雨	橋本二柳子	原史風	岩崎柳路
關本雅幽	平井光太樓	佐々木默閣	駒井美の作	柳川洲馬	黒木莢豆	塚崎松郎	高見柳骨（人營中）	高橋かほる	太田一聲	徳田双柳	二木幸堂	林田馬行	井上刀三

大阪市港區八條通南小路

橋本二柳子

大阪市北區南同心町二丁目四五〇

幹事 原史風

岸和田市下野町四一九

幹事 太田 一 聲

大阪市港區鶴町四丁目十三號地嵐山方

幹事關本雅幽

大阪市東區餌差町二二一番地

幹事 駒井美の作

兵庫縣武庫郡六甲苦樂園

幹事 佐々木 黙 園

大阪市東淀川區南濱一八二

幹事 西垣松雨

兵車縣明石郡垂水村字下畑林方

幹事 宮内 一 洲

山口縣山口町石原小路

幹事 柳川 洲馬

東京芝區愛宕町一ノ六大成社内

幹事 岩崎柳路

國官市等町五〇

市南樓頭五
井
花
童子

車 馬 井 在 置

市住吉區平野繪梅夕枝町五丁目

車馬松

仁川仲町二丁目八